

厚生労働行政推進調査事業費補助金
(政策科学総合研究事業(政策科学推進研究事業))
分担研究報告書

重層的支援体制整備事業の評価指標案の作成と評価活動プロセスに関する研究

研究分担者 川村 岳人 立教大学 准教授

本研究は、政令指定都市・北九州市における包括的支援体制の構築に向け、重層的支援体制整備事業に関する取り組みの評価活動を通じて、各区における事業の実施状況や課題を可視化するためのロジックモデル案を構築し、評価指標の検討に向けた基盤を整理することを目的とした。まず、実務を担当する全7区の担当係長へのヒアリングを行い、本事業の実施体制に関する実態把握を試みた。その上で、事業を先行して実施してきた一部の区を対象としたワークショップを通じて、ロジックモデル案の構築を進めた。評価指標の検討に向けては、MSC (Most Significant Change) を援用して実践上の重要な変化を把握するとともに、ロジックモデルを用いて活動・成果・目指す地域像のつながりを構造化した。今後は、ロジックモデル案を活用しながら、重層的支援体制整備事業の取り組みの改善や実施計画の見直しに資する評価指標の検討を進めていくことが求めら

A. 研究目的

北九州市は政令指定都市であるため、重層的支援体制整備事業(以下、「重層」)導入後は、本庁と区(支所)という二つの組織によって実施されることになる。また、2008年より導入された市の独自事業「いのちをつなぐネットワーク」(以下、「いのちネット」)は、重層の理念を一部先取りするような画期的なものであったが、時間の経過とともに課題も顕在化しており、いかにしてこの事業の課題を整理し、重層として位置づけていくかが問われることになる。本年度は、北九州市における包括的支援体制の構築に向け、重層の実施状況や課題を可視化するとともに、各区における取り組みの振り返りや改善の検討に資するロジックモデル案を構築し、評価指標の検討に向けた基盤を整理することを目的とした。

B. 研究方法

研究方法として、実践と研究を一体的に行うアクションリサーチの手法を用いた。具体的には、行政および重層の受託団体の職員、評価活動の専門家、研究者からなる評価チームプロジェクトチームを組織化し、打ち合わせを繰り返しながら取り組みを進めた。具体的にはまず、全7区の担当係長を対象にヒアリングを実施し、重層の実施体制や運用上の課題に関する実態把握を行った。次に、事業を先行して実施してきた八幡東区および八幡西区を対象として、複数回の評価ワークショップを実施した。ワークショップでは、ケースレビュー、ロジックモデル案の構築、評価指標の検討に向けた論点整理を段階的に進めた。また、評価指標の開発にあたっては、MSC (Most Significant Change) を援用し、関係者が実践のなかで経験した重要な変化を事例として持ち寄り、その意味を共同で解釈する方法を取り入れた。さらに、ロジックモデルを用いて、活動、成果、目指す地域像の関係性を整理・構造化した。

(倫理面への配慮)

北九州市に本研究の目的・内容に関して説明を行い、研究成果の公表を行うことについて書面で同意を得たうえで研究を行った。

C. 研究結果

本年度の研究結果として、第一に、全7区の担当係長へのヒアリングを通じて、重層の実施体制に関する実態把握を行うことができた。各区においては、従来、いのちネットの取り組みが実施されていたが、これまでの課題も踏まえながら、重層としてどのように読み替え、位置づけ直すのか、さらには重層を活用して何をを目指すのかというビジョンを関係者間で協議し、共有する必要があることが明らかとなった。そのため、各区の現状や課題を共通の枠組みで整理し、可視化していく必要性が確認された。

第二に、八幡東区・八幡西区における評価ワークショップを通じて、事例の振り返りを踏まえた評価指標の検討を進めることができた。MSCを援用したことにより、数値指標のみでは把握しにくい実践上の変化や、関係機関との連携の中で生じた変化を記述的に捉えることが可能となり、これらの変化をロジックモデル案に反映するための論点を整理することができた。

第三に、ロジックモデル案の構築を通じて、重層における活動、成果、目指す地域像のつながりを整理することができた。これにより、北九州市における包括的支援体制の評価に向けた基本的な枠組みを示すことができた。今後はロジックモデル案を踏まえながら、各区の実情に即した評価指標を具体的に検討していくことが求められる。

D. 考察

本研究の意義は、重層の実施状況や課題を、単に個別事例や印象として把握するのではなく、評価活動を通じて構造的に整理し、各区における振

り返りや改善につなげるための枠組みを提示した点にある。特に、MSCの援用によって、数値化しにくい実践上の重要な変化を把握しうること、またロジックモデルの採用によって、活動と成果の関係を関係者間で共有しやすくなることが示唆された。さらに、評価活動のプロセスおよびロジックモデルの案の構築は、重層の実施計画の策定・見直しに向けて、取り組みの方向性や重点課題を整理するための視座を提供するものとなった。

他方で、本年度の取り組みは八幡東区・八幡西区の実務者を対象とした検討であり、評価指標の具体化も今後の課題として残された。今後は、今回構築したロジックモデル案を他区でも活用しながら、各区の実情に応じた適用可能性や改善点を検証するとともに、ロジックモデルに基づく評価指標の設定に向けた検討を進めていく必要がある。

E. 結論

本研究では、北九州市における包括的支援体制の構築に向け、重層に関する評価活動を実施し、八幡東区・八幡西区における評価ワークショップを通じて、ロジックモデル案を構築した。MSC(Most Significant Change)を援用することで、数値では捉えにくい実践上の重要な変化を把握し、ロジックモデルを用いることで活動・成果・目指す地域像のつながりを整理することができた。今後は、各区においてこのロジックモデル案を活用し、適用可能性や改善点を検証するとともに、ロジックモデルに基づく評価指標の設定に向けた検討を進めていく必要がある。

F. 健康危険情報

(分担研究報告書には記入せずに、総括研究報告書にまとめて記入)

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし